

宮城県慶長使節船ミュージアム サン・ファン館 館長

ひらかわ あらた 平川 新

未来への航路

古文書のレスキュー

2011年4月3日、石巻の本間英一さんから電話が入りました。3月11日の大津波で一棟だけ土蔵が残った、中に古文書がある、ということでした。

敷地には、住宅2棟、土蔵2棟、醸造蔵と板倉が立ち並んでいました。津波でほとんどが破壊されたのですが、土蔵1棟だけが奇跡的に流出を免れていたのです。

4月4日に門脇を訪ねましたが、あたり一面はガレキの山。近くの門脇小学校は焼けただれていました。その惨状を目の当たりにして、息をのむ思いでした。土蔵もガレキのなかに埋もれていたのですが、自衛隊がガレキを除去したところ、土蔵は姿をとどめていました。前年に、この土蔵の基礎を固める工事をしていたのが幸いしたとのことでした。

土蔵の1階は水浸しになりましたが、2階までは浸水しておらず、保管していた古文書や古い写真などは幸



ガレキを撤去したあとの本間家土蔵



ガレキの中にたたずむ本間家土蔵。斎藤秀一撮影

⑤ 東日本大震災と本間家土蔵

い無事でした。NPO法人宮城資料ネットと東北歴史博物館のメンバー10人ほどで4月8日にレスキューを実施し、土蔵から段ボール箱60箱ほど運び出して東北歴史博物館で保管してもらったのです。

綿、小間物、綿などを積んで戻ってきた。北海道や新潟とも取引をしていたことがわかります。

土蔵の保存

本間さんの祖母の生家である武山家は、江戸時代から千石船主として海運業に従事していました。明治に入ると金融業や醸造業も手がけた石巻有数の事業家でした。町会議員や石巻町長なども歴任しています。大正15年には武山家の三女が嫁いだ本間家に経営権が譲渡され、昭和45(1970)年まで営業していました。

本間さんは被災した土蔵を撤去するつもりだったのですが、この土蔵は震災から生き残った家徳です。残った家徳ですから残しませんか、という私の提案を受け入れてくれました。専門家をお願いして建築診断をしたところ、修復して保存することは可能との

結果が来ました。そこで修復費用を確保するために、宮城資料ネットと石巻千石船の会、石巻若宮丸漂流民の会が中心となって、石巻震災土蔵メモリアル基金を立ち上げ、全国からカンパを求めました。370万円ほどが寄せられ、2013年11月に修復を終えるこ

とができたのです。修復完了後、本間さんは土蔵を私設の資料館として公開しています。千石船や石巻の歴史など郷土史の資料のほか、本間家に伝わる陶器類や屏風なども展示されています。震災後、門脇町の移り変わった様子が見られる写真もあります。

土蔵のなかには、江戸時代から明治時代にかけての仕切状や帳簿などの経営文書がたく



ひらかわ・あらた 昭和25年、福岡県出身。東北大学名誉教授。東北大学災害科学国際研究所の所長などを経て、平成26-31年度まで宮城学院女子大学学長を務めた。専門は日本近世史、歴史資料保全学。令和4年4月に、3代目のサン・ファン館館長に就任した。